

ピア・レスポンスが日本語ライティングのビリーフに 与える影響 ―学部留学生への調査からの一考察―

The Effect of Peer Response on Beliefs about Japanese Writing: A Consideration Based on a Survey of Undergraduate International Students.

安高 紀子^{*1, *2} 生天目 知美^{*3} 合田 美子^{*2}
Noriko ATAKA^{*1, *2} Tomomi NABATAME^{*3} Yoshiko GODA^{*2}

明治大学^{*1} 熊本大学^{*2} 東京海洋大学^{*3}
Meiji University^{*1} Kumamoto University^{*2}
Tokyo University of Marine Science and Technology University^{*3}

＜あらまし＞ 本研究では、協働学習のひとつであるピア・レスポンス(以下 PR)は日本語ライティングのビリーフに影響を与えるのかを探る目的で、学部留学生 2 名に対し、よい文章に対するビリーフ調査を PR 実施の前と後の 2 回行い、分析した。その結果、PR 実施後には、自身のビリーフの強化や新たな観点の獲得が確認され、PR は執筆文章を改善するだけでなく、よい文章に対するビリーフにも影響を与えていることが示唆された。
＜キーワード＞ピア・レスポンス、ビリーフ、日本語教育、アカデミック・ライティング

1. はじめに

日本語学習者対象のライティング教育では文章の執筆プロセスにピア・レスポンス(以下、PR)を取り入れた実践が広く行われている。PR とは「作文の推敲のために学習者同士がお互いの書いたものを書き手と読み手の立場を交替しながら検討する活動」(池田 2007, p.71)で、アイデアの獲得や思考の深まりといった効果があるとされる。PR の実践研究には、PR での発話やプロダクトを対象にしたものが多く、PR の有効性に関する知見が得られている。

PR では、ピアの執筆文章がよりよい文章になるよう、学習者自身のよい文章のビリーフに基づいて評価し、フィードバックが行われる。このように、他者を評価する経験は目標である評価基準の理解を促し、学習を評価するメタ認知能力の育成につながる(西岡ほか 2015)という。したがって、PR の経験は学習者が考えるよい文章のビリーフにも、何らかの影響を及ぼしていることが推測される。しかし、PR がビリーフにどのような影響を与えているのかは管見の限り明らかにされていない。

そこで、本研究では PR が学習者のよい文章のビリーフに与える影響について、PR 実施の前後に行ったビリーフ調査の記述と PR およびインタビューの発話を照らし合わせ、ビリーフへの影響を探ることを目的とする。

2. 研究方法

2.1. 調査概要

調査は 2023 年 11 月に Zoom を用いて実施した。調査協力者は都内大学の学部留学生 1 年生(中国語母語話者)2 名で、日本語能力は JLPTN1 相当、アカデミック・ライティング(以下 AW)の基礎を修了した段階にあった。

調査の流れは次の通りである。まず、意見文の執筆(600 字程度)を行い、ビリーフ調査(PR 前)を実施した。その後、PR(20 分×2 回)、自己推敲を行い、最後にビリーフ調査(PR 後)およびフォロー・アップ・インタビュー(以下インタビュー)を実施した。

ビリーフ調査では、調査シートに各自が設問に対して回答を記入した。設問は「今回のテーマでよい文章を書くときに、大切なことは何だと思いましたか」で、文字数制限は設けず、自由記述とした。

2.2. 分析対象と方法

分析対象は、PR 前と後に実施した 2 回のビリーフ調査の自由記述、そして、PR およびインタビューでの発話を文字化したデータである。分析では、ビリーフ調査の自由記述から、調査協力者がよい文章の執筆で大切だと考える観点を抽出する。次に、PR 実施の前後の観点を比較し、特徴を分析する。そして、PR およびインタビューでの発話と照合することによって、特徴の要因を考察する。

3. 結果と考察

3.1. 協力者 A・B のよい文章のビリーフ

協力者 A・B がよい文章の執筆で大切だとする観点をビリーフ調査の記述から抽出し、PR 実施の前後で整理したものを表 1 に示す。表 1 について、PR 前と PR 後を比較すると、PR 前のみに示された観点、PR 前後で維持された観点、PR 後に新たに現れた観点という 3 つの特徴が見られた。

表 1 協力者 A・B のよい文章のビリーフ

	PR 前	PR 後
協力者 A	テーマとの関連性	—
	具体的事例の提示	—
	読み手への配慮	読み手への配慮
	一貫性	一貫性
	—	AW にふさわしい表現の使用
協力者 B	—	論理展開
	テーマとの関連性	—
	課題の指示の順守	—
	読み手への配慮	読み手への配慮
	論理展開	論理展開
	AW にふさわしい表現の使用	日本語の正確さ

3.2. PR 前と PR 後の比較における特徴

3.2.1. PR 前のみに示された観点

「テーマとの関連性」、「具体的事例の提示」、「課題の指示の順守」の 3 つあり、これらは書く内容に関する観点で、書くべき条件を満たすことは必須とも言える。PR では、課題の指示を確認する発話があったものの、実際の A・B の文章はこれらの書くべき条件を満たしており、問題がなかったため、これらの点は PR 後には記述されなかったものと思われる。

3.2.2. PR 前後で維持された観点

A・B ともに「読み手への配慮」が挙げられており、PR 前後で維持された。A は「自分の主張をよりよく理解してもらうために、定義・背景・状況などの説明も欠かせない」と記しており、読み手の理解を重視していることがわかる。PR でも、A は B に対して詳細な説明要求を行っている。同様に、B も A に対して説明不足を指摘する発話が見られた。

もう一点の維持された観点に、A の「一貫性」、B の「論理展開」がある。「一貫性」は文章全体、「論理展開」は主張と根拠など要素間のつながりに注目するもので、PR では

A・B ともに、つながりに関する問題の指摘、改善のための具体的なフィードバックを受けている。インタビューで、B は論理の飛躍を指摘されたことを報告し、それは自身の癖であると認め、今後も気を付けたいと言及している。

このように PR 前後で維持された観点は、PR 前から自己の意識にあったが、PR でピアという他者からの客観的な意見を得たことで、さらに意識が強化されたと推察される。

3.2.3. PR 後に現れた観点

PR 後に新たに出現した観点は、A のみに見られた。一つ目は「AW にふさわしい表現の使用」で、A は B から「もっと複雑な言葉を使った方がいい」と PR で語彙の選択や表現に対して 7 回もの指摘を受けていた。また、A 自身もインタビューで、PR でもっとも役立ったのは言語表現への指摘だと述べている。このように、B からの複数回の指摘が A に言語表現に意識を向ける要因になったと言える。

二つ目は「論理展開」である。PR で A 自身は指摘を受けることはなかったが、反対に B に対して論理の飛躍を指摘し、論拠の提示を求める場面が 2 回見られた。A は PR 後のビリーフに「文章を論理的に展開していくことが大切だ」と記しており、PR で B の文章を読み、問題点を感じたことから、「論理展開」の重要性を認識したと考えられる。

4. まとめ

本研究では、日本語ライティングにおける PR の実践がビリーフに与える影響を探る目的で、PR 前後のビリーフ調査を比較、分析した。その結果、PR を通じて、自己との相対化による新たな観点の獲得、自己のビリーフの強化が確認され、PR は文章を改善するだけでなく、よい文章に対するビリーフにも影響を与えていることが示唆された。

謝辞: 本研究は科学研究助成事業 23K00640 の助成を得た

参考文献

- 池田玲子(2007)ピア・レスポンス.池田玲子, 館岡洋子(編著).ピア・ラーニング入門—創造的な学びのデザインのために.ひつじ書房
- 西岡加名恵,石井英真,田中耕治(編著)(2015)新しい教育評価入門—人を育てる評価のために.有斐閣コンパクト